

第三十九回

# 加子母歌舞伎公演

平成二十三年九月四日

振付け指導 松本団女

主催 加子母歌舞伎保存会

後援 中津川市、中津川市教育委員会、

加子母文化協会、加子母松扇会、

加子母風起こし実行委員会、

明治座活用委員会

加子母の村芝居は、江戸中期から祭礼と結び付いて上演されていたと言われます。下郷神社の前に、明治二十七年に建てられた「明治座」がさらに芝居熱を高めていったと思われます。しかし戦後の混乱から衰退一途。ところが昭和四十七年に明治座が岐阜県指定重要有形民俗文化財に指定されたのを機会に諸先人皆様方のご努力で加子母歌舞伎が何年かぶりに復活。以来『第三十九回加子母歌舞伎公演会』を開催する運びとなりました。役者部会を中心に、諸準備・稽古と励んで参りました。小学生・中学生こうした後継者の子供さんたちも増え、ご協力に感謝申し上げます。また存続は、文字通り地域住民の皆様方のご協力なくしては達せられぬもので、これほど金と日間のかかる芸能は他にはないからであると思えます。郷土芸能を支えるのは、取り組んでいただけの人の情熱であり、松本団女師匠を始めとする義太夫の方々、下座、衣裳、顔師等、なくてはならぬ存在でもあります。こうした長い歴史文化、交流と観光の拠点として地場産業に結び付き、発展の一役を担っていることも忘れてはならないと思います。このよくな大きな役割の中で、今後も存続と活用も含め一層の努力を傾注し、伝統文化を次の世代へと橋渡しすることが出来ればと思います。皆様方の一層のご援助とご指導ご声援を心からお願ひ申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

# 一、会稽扇曾我鶴ヶ岡八幡対面の場

小学生にて相務め申し候

工藤左工門祐経	加藤 なつみ	(小6・下桑原区)
曾我五郎時致	伊藤 万由子	(小6・番田区)
曾我十郎祐成	三浦 美月	(小6・小郷区)
舞鶴	萩原 美南	(小6・小和知区)
虎御前	竹内 若菜	(小6・中切区)
化粧坂少将	可知 花	(小6・番田区)
八幡三郎行氏	伊藤 一路	(小2・上桑原区)
近江小藤太成家	今井 真央	(小3・下桑原区)

## あらすじ

曾我の対面の場は、通常、工藤祐経館で上演致しますが、今回は鶴ヶ岡八幡へ、工藤が大磯の虎、化粧坂の少将、そして舞鶴を伴参詣の折、舞鶴からの取り成しで、曾我の五郎、十郎兄弟と対面する。敵を目前に、血気にはやる弟、それを制する兄、二人は工藤から、父を討つたいきさつを聞き、工藤から盃をもらうが、五郎は盃をたたき割る。工藤は二人に富士の巻狩の役目を終えた後、討たれてやろうと本心を明かし、後日の再会を約して幕となります。

小学生の熱演をごらん下さい。

# 二、縁結神「釣女」

加子母歌舞伎保存会にて相務め申し候

大名	伊藤 亮子	(番田区)
上臈	善田 奈緒	(中桑原区)
恵比寿三郎	今井 梓沙	(小郷区)
太郎冠者	安江 恒明	(万賀区)
醜女	三浦 正樹	(小郷区)

## あらすじ

ところの某大名が 従者の太郎冠者と二人で艶福の噂の高い西宮恵比寿大明神に参詣致し 何卒良き妻をお授け下されと 一心不乱に拝みますと突然 恵比寿大明神が現れ 汝等の妻は 西宮一の木田橋のほとりに良き妻が待っているとお告げ 二人は心勇み木田橋に急ぐのである 木田橋に来てみれば 妻ではなく釣竿が落ちてある 恵比寿様は常日頃釣が好きであるからこの釣竿で良き妻を釣れとの教えで有ろうとなり 二人は一心こめて釣竿の糸をたれる 大名は美女 太郎冠者はしこめ(醜い)を釣り上げ目出度し目出度しにて幕となる ユーモアあふれる楽しみの舞踊物であります

# 三、墓妖術瀧夜叉姫 筑波山岩屋の場

加子母中学生にて相務め申し候

瀧夜叉姫	桂川 広乃	(中3・番田区)
浦辺六郎末武	丹羽 甲	(中3・小郷区)
臼井荒太郎	田口 幸子	(中切区)
源頼光	伊藤 成美	(中1・番田区)
姫松	伊藤 桃子	(中3・番田区)
良姫	藤本 真理乃	(中3・中桑原区)
七草四郎兼秀	瀬瀬 理桜	(中2・上桑原区)
三島小女郎	今井 梓沙	(小郷区)
桔梗	今井 美希	(中2・下桑原区)
松ヶ枝	安江 奏音	(中2・万賀区)
小菊	田口 早織	(中2・上桑原区)
こづえ	日下部 光	(中2・下桑原区)

## あらすじ

平将門の息女滝夜叉姫は幼少の折、将門討死と知るや、唐土に渡り墓妖術を会得し、今は残党を集めお家再興の機会をうかがい、筑波山の古御所に妹良姫と住んでいる源頼光の家臣、浦辺六郎末武は頼光の命を受け、妻姫松と共に奥州へ向かう途中、滝夜叉の家来に妻をさらわれる。

折しも注進、七草四郎、小女郎が味方の敗滅を知らせにやってくる 滝夜叉は良姫を姫松にたくし落ち延びさせる。そして、浦辺と荒太郎が滝夜叉に詰め寄る。ついに頼光と対面するが、時節を待って旗揚げせよと、一同又の再会を約し幕となります。

# 四、一乃谷嫩軍記 熊谷陣屋の場

加子母歌舞伎保存会にて相務め申し候

熊谷次郎直実 秦雅文 (上桑原区)

源義経 安江恒明 (万賀区)

弥陀六 (実は弥平衛宗清) 丹羽貞蔵 (小郷区)

梶原平次景高 三浦正樹 (小郷区)

堤軍次 丹羽崇 (小和知区)

相模 岩木誠 (上桑原区)

藤の局 谷川康弘 (下呂市)

家来 伊藤亮子 (番田区)

善田奈緒 (中桑原区)

田口幸子 (中切区)

## あらすじ

源平、一の谷の合戦に熊谷次郎直実の一子、小次郎が初陣として加わっているため、母の相模は心配のあまり、夫の言いつけを破り陣屋へやって来た。一方、平経盛の妻、藤の方は、一子、敦盛が熊谷に討たれたと聞いて、陣屋へ訪ねて来た。二人は以前主従の間柄であり、藤の方は相模に熊谷を討つ助太刀を頼むのであった。そして梶原平次が弥陀六という老人を引立て、平家のために石塔を立てた詮議をすると陣屋へ来る。

熊谷は沈んだ様子で陣屋へ帰って来た。我が子の敵と切りかかる藤の方に、戦の様子を語り聞かす。

いよいよ義経の前で敦盛の首実検が行なわれることとなった。実は熊谷は我が子小次郎の首を身代わりにしたのであった。相模は首を抱き上げ嘆き悲しむ。また弥陀六こそ平家の武士、弥平兵衛宗清であった。熊谷は世の無情を嘆き出家をしてそれぞれに別れていく。

振付指導 松本団女

太夫 竹本美功  
竹本美善

三味線 豊澤順八  
原田知也

下座 松本扇女  
松本奈津美

顔師 松本宙士  
松本茂み

床山 松本真由美

着付 市川恵美子  
足立好子  
林まゆみ  
柘植理恵子

衣裳 日吉ハイランド

